

## 成人看護学実習Ⅱ（急性期）における学生の学び —実習終了後のレポートからの分析を通して—

藤原正恵，江口秀子，葛場美那

大阪青山大学健康科学部看護学科

Nursing student learning in adult nursing practice II (acute phase)  
—through analysis from report after practical training—

Masae Fujiwara, Hideko Eguchi, Mina Kuzuba

School of Nursing, Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University

### 要 旨

本研究の目的は、成人看護学実習Ⅱ（急性期）における周手術期看護特有の学びを明らかにし、今後の実習のあり方について学内演習を踏まえて検討することである。

研究方法は、A 大学健康科学部看護学科の3年生で本実習を終了し、研究の趣旨に同意した学生75名の実習終了後のレポートを分析した。

その結果、学びは、【手術療法が患者・家族に及ぼす影響】【包括的なアセスメント】【周手術期の特徴を踏まえた援助】【退院に関する認識】の4カテゴリと15サブカテゴリに分類できた。これらの学びの要因として、手術見学や受け持ち患者の選定を工夫したことが影響していると考えられる。また、学生は患者との信頼関係の構築により多面的な情報収集の必要性を学んでいたことから、学生と患者との関係性が向上するように指導していくことが重要である。さらに、学生の知的好奇心や刺激を高めるような声掛けや質問も学びを促進させるために必要である。

今後は、学生の学びを深化させるためにカンファレンスを有効に活用すること、実習前に実践できる知識の統合や発展につながる学内演習のあり方を検討する必要がある。

**Key words** : adult nursing practice II (acute phase) , learning, nursing student, report

キーワード : 成人看護学実習Ⅱ（急性期）、学び、看護学生、レポート

### I. 緒言

近年看護系大学が急速に増加し、大学における看護基礎教育の重要性、特に教育の質保証が重要な論点になってくると考える。一方、看護基礎教育における臨地実習では、患者の在院日数の短縮化・患者の安全確保・患者の権利の尊重などの社会状態の変化から、実習の範囲や機会が限定され、実習が十分

に展開されにくい状況<sup>1)</sup>が指摘されている。

このような実習での問題点を踏まえて文部科学省は、平成29年に「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」を公表し、その中で、臨地実習について「看護の知識・技術を統合し、実践へ適応する能力を育成する教育方法の一つである」<sup>2)</sup>とし、看護基礎教育での臨地実習の位置づけを明記している。加えて「チーム医療において必要な対人関係の能力や

倫理観を養うとともに、看護専門職としての自己の在り方と省察する能力を養う<sup>2)</sup>とし、実習での学習のねらいも明らかにしている。すなわち、臨地実習は、看護学教育の中で重要な教授学の過程であり、学生にとって多くの学びを得て、人間的にも成長する機会でもある<sup>3)</sup>と言える。

健康段階に応じた看護実践の中では、急性期にある人々に対する看護実践について、「周術期にある人の特徴の理解と生命維持、身体的リスクの低減と症状緩和、安全と安楽の保持のための看護実践を学ぶ」ことをねらい<sup>4)</sup>として掲げている。

成人看護学急性期の実習での学びに関する先行研究では、手術室見学実習での学びとして、手術室看護師の役割の理解や手術患者の不安と苦痛の理解<sup>5)</sup>、手術室看護師に求められる技術や医療スタッフ間での連携<sup>6)</sup>が明らかにされている。また、成人看護学実習で学生が認識している学びと実習目標との関連を明らかにした研究では、看護計画の立案・実施・評価および手術前後の患者の病態把握や観察の必要性、状態にあった援助方法の工夫の学びが多くみられた<sup>7)</sup>としている。さらに看護基礎教育カリキュラム改正前後の成人看護学実習（急性期）における学生の学びを比較した研究では、カリキュラム変更後は「手術を受ける患者の特徴を踏まえた個別的な看護実践ができる」に関連した気づきが少なくなっている<sup>8)</sup>ことが指摘されている。さらに、急性期外科病棟で実習した学生の周手術期看護の学びについて、「先を見通して必要なケアをする」「日々の変化を感じる」「異常を見逃さない」「主体的な取り組みを支援する」など<sup>9)</sup>が挙げられている。以上のことから学生の手術室見学での学びや周手術期の学びの特徴と今後の課題が明らかになった。しかし、先行研究と本学実習の体制が異なることから、先行研究結果以外にも本学実習での学びが抽出されると考える。

一方、急性期病棟を含め在院日数の短縮が一般化している現状では、短期入院の中で質の高い周手術期看護を提供するには、看護基礎教育としての周手術期看護教育の重要性が増している<sup>10)</sup>との指摘もある。

A 大学健康科学部看護学科（以下 A 大学とする）では、成人看護学実習Ⅱ（急性期）前の前提科目として、2 年前期では成人看護学概論を開講し成人期にある患者の特徴を学習し、2 年後期では、成人看護学援助論Ⅱ（急性期）の中で、手術を受ける患者および家族への看護を学習している。さらに 3 年前

期では、成人看護学演習Ⅱの中で、手術を受ける患者の看護過程および必要な看護技術の演習を行い、実習に備えている。

そこで今回、学科開設後初めての成人看護学実習Ⅱを終え、在院日数の短縮化が一般化している状況下での実習で学生はどのような周手術期看護特有の学びを得ているのかを明らかにし、今後の実習のあり方について学内演習も踏まえて検討する。

## Ⅱ. A 大学における看護学実習の概要

### 1. 4 年間の実習展開

A 大学における看護学実習は、表 1 に示したように、1 年前期に 1 週間の基礎看護学実習Ⅰ、2 年後期に 2 週間の基礎看護学実習Ⅱを実施している。これらの基礎看護学実習を基盤として、3 年生後期から半年間かけて領域別実習を行っている。さらに 4 年前期では、2 週間ずつの在宅看護学実習と実習の総括としての統合実習を位置づけている。

### 2. 成人看護学実習Ⅱ（急性期）の実習体制

本実習は、上述したように基礎看護学実習Ⅱを終了した半年後の 3 年生後期から開始し、学生は 1 病棟に 4・5 名ずつに分かれ、手術を受ける患者を受け持ち、表 2 に示した実習目標に沿って実施している。実習期間は 3 週間で、その間に受け持ち患者の

表 1 A 大学における看護学実習の展開

科目	実習時期	実習期間
基礎看護学実習Ⅰ	1 年前期	1 週間
基礎看護学実習Ⅱ	2 年後期	2 週間
成人看護学実習Ⅰ（慢性期）	3 年後期	3 週間
成人看護学実習Ⅱ（急性期）	3 年後期	3 週間
老年看護学実習Ⅰ	3 年後期	1 週間
老年看護学実習Ⅱ	3 年後期	3 週間
小児看護学実習	3 年後期	2 週間
母性看護学実習	3 年後期	2 週間
精神看護学実習	3 年後期	2 週間
在宅看護学実習	4 年前期	2 週間
統合実習	4 年前期	2 週間

表2 成人看護学実習Ⅱの実習目標から一部抜粋

<p>1. 必要な情報を系統的に収集し、周手術期にある患者の身体的・心理的・社会的特徴を理解することができる。</p> <p>1) 患者の疾患・病態と治療方針について説明できる。</p> <p>2) 麻酔および手術侵襲が患者の生体に及ぼす影響について説明できる。</p> <p>(1) 手術に必要な検査とその結果をアセスメントし、術前の状態から術後に起こりうる問題（術後合併症）について説明できる。</p> <p>(2) 麻酔や手術によって生じる苦痛、合併症、セルフケア能力への影響が説明できる。</p> <p>(3) 手術による機能障害と日常生活への影響について説明できる。</p> <p>3) 入院前の生活習慣・生活様式、家庭・社会での役割を理解し、手術療法が患者とその家族に及ぼす影響について説明できる。</p> <p>4) 疾病や手術が患者およびその家族にもたらす心理的影響について理解できる。</p> <p>(1) 疾病や治療の受け止め方、心理状態について説明できる。</p> <p>(2) 術後変化した自己像（機能の低下・喪失、ボディイメージの変化など）に対する患者およびその家族の心理を理解し、精神的援助の必要性について説明できる。</p>
<p>2. 手術を受ける患者の看護上の問題を把握し、術後の回復のに向けた看護計画を立案し、実践・評価できる。</p> <p>1) 術後の患者の状態と照らし合わせながら、必要な看護上の問題を列挙できる。</p> <p>(1) 回復過程の把握、および異常の早期発見のための観察、アセスメントができる。</p> <p>(2) 患者の回復を阻害する要因について説明できる。</p> <p>2) 術後合併症予防、苦痛の緩和、回復促進への援助、および退院後の自己管理に向けた看護計画が立案できる。</p> <p>(1) 術後の回復状態や患者の個別性を踏まえた看護計画が立案できる。</p> <p>3) 患者の安全・安楽・自立を考慮しながら計画に基づいた看護を指導者とともに実践できる。</p> <p>4) 期待された結果と照らし合わせ評価できる。</p>

手術見学も実施している。実習施設は近隣の4施設の協力を得ているが、いずれの施設でも入院期間の短縮に伴い、受け持ち期間は1週間から2週間前後と短く、大半の学生は、実習期間中に複数の患者を受け持っている。実習指導は、担当教員が実習指導者と調整し両者が指導にあたり、看護ケア実施時には受け持ち看護師の協力も得ている。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 対象者

A大学の健康科学部看護学科3年生で、2017年後期に成人看護学実習Ⅱ（急性期）を終えた学生78名のうち、研究の承諾が得られた75名（参加率96%）である。

#### 2. データ収集方法

本学実習終了後に、「実習での学びと課題」というテーマでレポートを課している。なお、学生にはレポート提出の目的については、今後の参考資料にする旨を説明している。学生の学びを把握する上で、自由に記述したレポートが質的に豊かなデータであると判断し、分析対象とした。

#### 3. 分析方法

学生のレポートから、臨地実習の学びに関する記述を意味内容が可能な限り損なわないように全て抽出し、意味内容の類似性に従ってサブカテゴリを構成し、カテゴリ化した。分析にあたっては共同研究者間で検討を行い、信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### 4. 倫理的配慮

実習終了後に、研究の目的と倫理的配慮を口頭と文書で説明した。説明内容は、成績に関係しないこと、研究目的以外には使用しないこと、匿名性の保持、自由意思による参加であること、同意を得た後もいつでも中止できること、中止をしても不利益は一切生じないこと、結果は論文で公表することとし、書面による同意を得た。

## Ⅳ. 結果

周手術期看護特有の学びとして、4カテゴリと15サブカテゴリに分類された（表3）。以下、カテゴリは【 】,サブカテゴリは〈 〉、生データは「 」で示す。

カテゴリは【手術療法が患者・家族に及ぼす影響】【包括的なアセスメント】【周手術期の特徴を踏まえた援助】【退院に関する認識】であった。

### 1. 手術療法が患者・家族に及ぼす影響

このカテゴリは〈手術・麻酔による生体への影響〉〈手術が心理面に与える影響〉〈手術が患者・家族の今後の生活に与える影響〉の3サブカテゴリで構成された。

〈手術・麻酔による生体への影響〉では、「麻酔・手術による生体への影響を学べた」「局所麻酔と全身麻酔では、侵襲が異なることを実感した」という記述にもあるように、手術見学を通して、また他学生の受け持ち患者の経過と比較して、術式の違いにより疼痛の程度や術後の安静度などが異なることを学びとしてあげられていた。〈手術が心理面に与える影響〉では、術前・術後に患者と関わる中で、不安には様々な原因があり、術前の不安は術後に影響することを学んでいた。〈手術が患者・家族の今後の生活に与える影響〉では、学生は家族との会話を通して「手術による入院で患者とその家族に与える影響を考えるきっかけとなった」という記述にあるように患者だけではなく家族への援助の必要性を学んでいた。また「…患者は家に帰りたくても帰れない状況に対する患者の思いと家族が家に帰らせたいと思っても家の環境が整わないという実態が理解できた」との記述にあるように、退院は患者および家族の思いだけではなく、退院後の受け入れ状況が整っていないと困難であることも学んでいた。

### 2. 包括的なアセスメント

このカテゴリは〈状況変化に伴う観察の重要性〉〈多面的な情報収集の必要性〉の2サブカテゴリで構成された。

〈状況変化に伴う観察の重要性〉では、手術後の経過日数によって患者の状態が変化することを目の当たりにし「同じ疾患・術式でも術後の経過が異なるため観察が必要である」とことを実感していた。また、「術後早期では、疼痛の緩和、合併症予防、早期発見のために病態把握をする」ことで看護ケアの根拠を明らかにする必要性を学んでいた。〈多面的な情報収集の必要性〉では、情報手段は、カルテからだけでなく日々の患者とのコミュニケーション、観察を通して行うことの大切さを学んでいた。また、情報収集の内容は、退院後を視野に入れ「術前の生活、家族との関係、本人の性格など幅広く情報収集する必要性」を、さらには合併症を想定して身体状況の変化およびそれに関連づけて心理・社会的側面を把握する重要性を学んでいた。

表3 成人看護学実習Ⅱ（急性期）での学び n=75

カテゴリ	サブカテゴリ	生データ	
手術療法が患者・家族に及ぼす影響	手術・麻酔による生体への影響	麻酔・手術による生体への影響を学べた (4人)	
		局所麻酔と全身麻酔では、侵襲が異なることを実感した	
		手術によって起こる侵襲がどれだけ患者に負担がかかるかが分かった	
		開腹手術は腹腔下手術とは異なり、術中出血量が多い、術後の安静度、疼痛の程度、ドレーン留置に伴う体動制限により離床への影響を実感した	
	手術が心理面に与える影響	不安について、何に対する不安なのかを知ることが大事である (2人)	
		入院、手術、退院に対して不安を抱える患者の心情を読み取れた	
		術前の不安軽減は、術後の体への負担軽減につながる (3人)	
		手術に対する想いは今までの経験から不安を軽減するのに役立っている	
	手術が患者・家族の今後の生活に与える影響	患者の「しんどい」との訴えは、身体的だけでなく心理面も含まれる	
		手術による入院で患者とその家族に与える影響を考えるきっかけとなった。	
		手術によるボディイメージの変容が退院後の患者や家族に与える影響について考える良い機会になった	
		手術の影響で患者が家に帰りたくても帰れない状況に対する患者の思いと家族が家に帰らせたいと思っても家の環境が整わないという実態が理解できた	
	包括的なアセスメント	状況変化に伴う観察の重要性	疾患、術式が同じでも、年齢、既往歴、家庭環境、入院前のADLにより回復状況が異なる
			バイタルサイン異常時に必要な観察点が何かを考えることができた
同じ疾患・術式でも術後の経過が異なるため、観察が必要である			
術前・術中・術後の患者の特徴を日々の変化を通して観察できた			
術後何日目であるかを把握したうえで、バイタルや全身状態を観察していく			
多面的な情報収集の必要性		術後早期では、疼痛の緩和、合併症予防、早期発見のために病態把握をする	
		元々のADLの状況について情報収集する	
		術前の生活、家族との関係、本人の性格など幅広く情報収集する必要がある(2人)	
		観察、コミュニケーション、カルテからの情報収集など多方面から患者を観察することが大切である (3人)	
		患者との会話からその表情や話し方、行動からも情報収集ができることに気づけた	
		症状の有無だけでなく、その症状の原因、症状の改善のために必要なケアは何かを考えることが必要である	
		起こる合併症のリスクとともに患者の生活・状態を把握することが大事である	
		患者の状態を想定し、観察項目と疾患や症状との相互関係を理解する必要がある	
		状態の悪化により問題や観察ポイントが増えていくため、総合的に観察し情報収集し、アセスメントをしていく必要がある (2人)	
身体的・心理的・社会的側面は、相互に関連している	身体的・心理的・社会的側面は、相互に関連している		
	日々刻々と変化していく患者の身体状況を捉えるとともに心理的・社会的側面を把握していることが重要である (3人)		
	目的をもって必要な情報を収集することが大切である (3人)		

表3 成人看護学実習Ⅱ（急性期）での学び（続き）

カテゴリ	サブカテゴリ	生データ
周手術期の 特徴を踏まえた 援助	回復過程に沿った 目標設定と 看護計画の立案	回復過程では術後経過日数により優先順位を考える（3人）
		今何が問題であるかをいち早く察知し、ケア計画を実施していく（2人）
		患者・家族の最終目標はどこかに注目する
		回復の段階を踏んだ目標の立て方、起こることの予測とその予防、早期発見のための計画立案が必要である（3人）
		元々のADLの状況に向かい目標を立て、リハビリを行う必要がある
	術前ケア	術前の状態を適切に評価することで、安全に手術や麻酔を受けることに繋がる
		元々持っている疾患を考えて良い状態で手術に臨めるように調整していく
	起こりうる合併症 を予測した観察	術前・術後の関わりで合併症予防のために術前・術後に実施しなければならないこと、観察すべきことが考えられた（2人）
		術前情報を基に術中・術後に起こりうる問題を予測し、今後の看護に活かすように意識することが大事である
		既往歴を踏まえて術後に起こりうる合併症について日々観察し、アセスメントする
		疾患や術式が異なるため、日々の観察や異常の徴候をいち早く予測する
		術前・術中・術後に起こりうる症状などの状態を踏まえて、予測する
		術後合併症予防のために必要な観察を行う（4人）
		術式や麻酔方法、既往歴や生活環境、術後の経過病日により起こりうる可能性のある合併症が異なる（4人）
	対象別に術後回復過程の経過を見据えた予測性を持った関りが重要である（2人）	
	合併症予防に 向けた援助	術前から起こりうる可能性がある合併症を把握し、予防の向けた必要なケアや観察点の知識をもち関わることで、異常時の早期発見や悪化させないケアに繋がる（3人）
		術後は、患者に起こりうる術後合併症に注意し、観察や援助を通して異常の早期発見につなげる（2人）
		術後は、合併症や今度起こりうることを予測して、これらを未然に防ぐことが大切である
		術後は合併症の起こりうるリスク、合併症の症状などを把握する
		合併症予防のために、「疼痛コントロール」「早期離床」のケアが重要である
	不安への援助	患者が抱えている術前・術後の不安への想いを受け止め関わる
		術前の不安軽減のためにオリエンテーションが必要である
		術前患者の不安への援助は、表情や前日からの変化を読み取り寄り添うことが大切である
		手術の不安、退院後の不安、社会的な役割に対する不安を抱えているため、心理社会面でのケアが必要である
		不安を軽減できるような言葉かけ（3人）や、すぐに対応できるスタッフが常時いることを伝えることが重要である
		不安を抱えている患者に対し傾聴する（3人）、タッチング

表3 成人看護学実習Ⅱ（急性期）での学び（続き）

カテゴリ	サブカテゴリ	生データ
周手術期の特徴を踏まえた援助（続き）	疼痛コントロールの重要性	術後患者では、疼痛が患者に及ぼす影響を実感できた
		疼痛が日常生活に与える影響や疼痛への必要な援助方法を学んだ
		痛み止めを適切に投与しながら合併症予防のために離床を進めることが大切である
		腹圧をかけずに疼痛を緩和しながらの離床方法が必要である
	回復促進への援助	回復過程に沿った援助が必要である（3人）
		状態の変化に伴い患者は苦痛や不安が強くなることを踏まえて関わる必要がある
		疼痛の持続の理由を説明し、リハビリを頑張ってもらえるように、患者と共に目標を立て、それに向かって励ましながら、一緒に頑張っているという姿勢をもつ
		離床の意欲を高めるようにする
		患者が入院前の生活に早く戻れるように関わる大切である
退院に関する認識	退院に向けた関りの時期	回復が早いので、入院前から退院の方向性を考える必要がある
		回復期では、退院に伴う困難や課題について退院を見据えた看護が必要である（4人）
		回復期には、退院に向けてのケア（活動量の拡大）が必要である
	退院指導に必要な情報	患者の生活習慣を知ることで、退院後にどのような生活をするのが目標なのかを頭に入れてケアを進めていく
		退院後の不安がある場合、患者の心理状態は状況により変化するため、その状況に応じたケアが必要となる。
		退院指導では、患者が一番心配していること、知りたいことは何かを把握することが大事である
	退院指導時の対象者への配慮	退院指導の対象は患者だけでなくその家族も含まれる
		患者と家族が安心して退院できるように、指導していく
		退院指導では、その人に合った指導内容が必要である（2人）
		退院後の生活を想像できるような関りを意識していく
		退院指導では、患者の知りたいこと・気を付けて欲しいことを分かりやすく説明することが大事である
		介護者の介護疲れやストレスがある場合は、社会資源の活用を提案する（2人）

### 3. 周手術期の特徴を踏まえた援助

このカテゴリは、〈回復過程に沿った目標設定と看護計画の立案〉〈術前ケア〉〈起こりうる合併症を予測した観察〉〈合併症予防に向けた援助〉〈不安への援助〉〈疼痛のコントロールの重要性〉〈回復促進への援助〉の7サブカテゴリで構成されており、学びの中で最も多かった。

〈回復過程に沿った目標設定と看護計画の立案〉では、周手術期では回復の経過が早いことを実感し、日々の身体的変化に伴って優先順位や看護目標が異なるため、「今何が問題であるかをいち早く察知し、ケア計画を実践していく」必要性を学んでいた。〈術前ケア〉について、安全に手術や麻酔が受けられる

ように「術前の状態を適切に評価する」ことや「…良い状態で手術に臨めるように調整していく」必要性を学んでいた。〈起こりうる合併症を予測した観察〉では、術前情報を基に「術前・術中・術後に起こりうる症状などの状態を踏まえて、予測する」といった記述にあるように術前から術後の状態を想定しながら観察し、アセスメントする必要性を学んでいた。〈合併症予防に向けた援助〉では、合併症を予測した観察を含め異常の早期発見や悪化させないケアが重要で、そのためには「…疼痛コントロールや早期離床のケアが重要である」ことを学んでいた。

〈不安への援助〉では、「術前の不安軽減のためにオリエンテーションが必要である」や「…術前・術後

の不安への想いを受け止め関わる」「不安を軽減できる言葉掛けや、すぐに対応できるスタッフが常時いることを伝える」「不安を抱いている患者に対し傾聴する、タッチング」するという記述にあるように、学生ができる範囲での不安への具体的な援助を学んでいた。〈疼痛のコントロールの重要性〉では、「疼痛が日常生活に与える影響や疼痛への援助方法を学んだ」との記述で見られるように疼痛による影響の重要性を実感していた。加えて、「(開腹術後に)腹圧をかけずに疼痛を緩和しながらの離床方法が必要である」との記述にあるように疼痛コントロールとして薬剤の使用以外でできる看護に対しての気づきを得ていた。〈回復促進への援助〉では、「回復過程に沿った援助が必要である」との記述に見られるように、回復過程を視野に入れながら援助していく必要性を学んでいた。また、回復促進には、「離床の意欲を高めるようにする」という記述にあるように、患者の回復への取り組む姿勢にも着目した学びを得ていた。

#### 4. 退院に関する認識

このカテゴリは、〈退院に向けた関りの時期〉〈退院指導に必要な情報〉〈退院指導時の対象者への配慮〉の3サブカテゴリで構成された。

〈退院に向けた関りの時期〉については、「回復が早いので入院前から退院の方向性を考える必要性がある」との記述にみられるように、入院前から退院を視野に入れた関りの必要性を学んでいた。また回復期では「…退院に伴う困難や課題について退院を見据えた看護が必要である」や「…退院に向けてのケア(活動量の拡大)が必要である」という記述にあるように、具体的なケア内容についての学びも得ていた。〈退院指導に必要な情報〉では、生活習慣、患者の心理状態を把握し、その状況に応じたケアの必要性および「…患者が一番心配していること、知りたいことは何かを把握する」の記述にあるように患者のニーズに沿った退院指導の必要性を学んでいた。〈退院指導時の対象者への配慮〉では、「退院指導の対象は患者だけでなくその家族も含まれる」「患者と家族が安心して退院できるように、指導していく」「退院後の生活を想像できるような関りが必要である」などの記述にあるように、退院指導については対象だけでなく、退院指導で何が重要なのかについても着目できていた。

## V. 考察

### 1. 周手術期にある対象者の理解

周手術期看護では、実習目標である『周手術期にある対象者の理解』は看護過程の展開やケア提供時において把握しておくべき必須項目である。

実習前の講義では、手術を受けることで身体的・心理的・社会的に及ぼす影響について数々の場面を通して教授しているが、学生は手術に対して具体的なイメージが湧かない状態で実習に臨んでいることが多いのが現状である。そのために実習では、学生が麻酔・手術による影響をイメージできるように手術見学を取り入れている。また学生は実習期間中に複数の患者を受け持つが、その際には、麻酔や術式による違いによって、患者への侵襲が異なることが理解できるように受け持ち患者を選定し、学びが深まるようにしている。このような配慮によって、学生の記述から、「麻酔・手術による生体への影響を学ぶことができた」や術式により侵襲の程度が異なることについての学びが抽出されたと考える。近年急性期看護学実習において手術の見学実習を取り入れている学校は増えているが、その学びの一つに木村ら<sup>11)</sup>は「手術患者の理解の深化」を挙げていることから、手術見学実習がこの項目の学びの要因に影響していると推測される。

また、手術侵襲による影響の学びは、実習での受け持ち患者を通して術直後の不安定な状態や強い苦痛を訴えている状態を目の当たりにした体験により改めて実感したものと考える。さらに、重症度の異なる対象を受け持ったことで、手術後の患者のイメージが広がり、その必要性が認識できたためと考える。

### 2. 包括的なアセスメント能力育成の重要性

本実習では、『必要な情報を系統的に収集し、回復過程に沿った観察、アセスメントができる』ことを目標の一つに掲げている。しかし、周手術期の患者は回復が早く、学生はタイムリーに必要な情報を系統的に収集し、回復過程に沿ったアセスメントをすることに困難感を抱いていた。特に患者の受け持ち期間が短い場合などはこの傾向が顕著にみられ、学生は回復過程についていけず、日々後追いで目標到達になっていたが、学生の学びとして、〈状況変化に伴う観察の重要性〉や〈多面的な情報収集の必要性〉が抽出されていた。これは、これらの重要性や必要性について担当教員が日々学生に意識的に指導



したことが影響していると考える。

具体的な学びとして、「観察、コミュニケーション、カルテからの情報収集など多方面から患者を観察することが大切である」「患者との会話からその表情や話し方、行動からも情報収集ができることに気づけた」という記述がある。これは、体験の少ない学生は、実習初期には情報収集の手段を主にカルテに頼ることが多いが、実習が進むにつれ患者との信頼関係が構築されることによってカルテからだけでは収集できない内容もあることを実感したためと考える。加えて「術後何日目であるかを把握したうえで、バイタルや全身状態を観察していく必要がある」との記述にあるように、周手術期においては、バイタルサインや全身状態の変化が重要な情報源であることも気づいていた。

このような気づきは、実践場面を通して獲得できるもので、その後の臨床現場でも活用できる重要な能力の一つであることから、今後も指導を強化していくことが必要と考える。

### 3. 周手術期の特徴を踏まえた援助

周手術期の援助は、成人看護学実習での中核的な内容で、今回の学びの中でも7サブカテゴリと最も多かった。

まず、〈起こりうる合併症を予測した観察〉で注目すべき点は、「疾患や術式が異なるため、日々の観察や異常の徴候をいち早く予測することが大切である」との記述にあるように、予測性をもって観察するという学びが得られていたことであった。これは、体験の少ない学生にとって、学ぶことが困難な内容であるが、このような学びを得ていた理由として、高比良ら<sup>12)</sup>は、学生の学習を促進する関りとして、(1)卓越した看護者のロールモデルがいる、(2)看護師が学生を見守り、声をかけ誘導する、(3)看護師の質問や指導により、学生が自分を客観視する機会となることを挙げている。すなわち、本実習では、術直後の観察場面の大半は看護師による実践場面の見学であり、その際に看護師がロールモデルとなり、学生の知的刺激を引き出すような声掛けや質問・指導が学生の学びを促進したと考える。

また、学生の学びから〈起こりうる合併症を予測した観察〉が〈合併症予防に向けた援助〉へと発展していることが明らかになった。それは学生の記述として「…合併症予防のために術前・術後に実施しなければならないこと、観察すべきことが考えられた」や「…日々の観察や異常の徴候をいち早く予測

する」ことの重要性に気づき、そのことで〈合併症予防に向けた援助〉として「疼痛コントロール」、「早期離床」のためのケアが重要であるとの気づきに発展できていることから分かる。これは、学生の気づきを明確にし、その気づきがどのようなことに関連し、それをさらに発展させるために必要なことは何かを踏まえた指導を行った効果によると考える。

〈不安への援助〉については、具体的な援助として「不安への想いを受け止める」「不安の心情を読み取り寄り添う」「適切な言葉がけや常時側にいることを告げる」「傾聴する、タッチング」を行うことが記述されていた。一方、不安を軽減するには、不安の内容について、専門的知識を踏まえた説明も必要であるが、このような患者への説明についての記述がみられなかった。これは、施設の方針および患者への倫理的配慮を重視したことが影響していると考えられる。今後は、学生が実際に患者に指導するまでには至らなくても、指導内容や方法を吟味できるようなシミュレーションを導入するなどの工夫も必要と考える。

工藤ら<sup>13)</sup>は、周手術期の学びとして【先を見通して必要なケアをする】【異常を見逃さない】【日々の変化をとらえる】を挙げている。本結果でもこれらと同様な内容が抽出された。一方で、本学独自の学びとして【不安への援助】【疼痛コントロールの重要性】【回復促進への援助】が抽出された。これは、工藤らの研究対象が消化器外科の1病棟で実習した学生であったのに対し、本学では、消化器外科をはじめ泌尿器科、整形外科、脳外科病棟で実習を行った学生からの学びを対象としたことが影響している可能性がある。すなわち、受け持つ患者の疾患・術式による違いによって学生の学びに相違が生じると言える。今後、これらの学びを学生間で共有できる場を設けることでより学習が深まると考える。

### 4. 成人看護学実習Ⅱ（急性期）の課題

今回の学びの特徴として〈起こりうる合併症を予測した観察〉や〈合併症予防に向けた援助〉では合併症の予測や予防の必要性・重要性といった視点に関するものが大半で、実践に該当する学びについてレポート上の記載が少なかった。

これらの学びを文部科学省が提唱している急性期にある人々に対する看護実践のねらいと比較してみると、「周術期にある人の特徴の理解」、「身体的リスクの低減と症状緩和」についての学びは多く得られていたが、「安全と安楽の保持のための看護実践を学

ぶ」については、レポートの記載が少なかったと言える。このことから紙面上だけで学びを評価することに限界があることが示唆された。また、看護実践について島田<sup>14)</sup>は、日々変化する情報の分析や目の前でやらなければならないことに一生懸命で、患者の状態に合わせて実践できる知識の統合や発展までに至らない状況にある<sup>15)</sup>ことを指摘している。本学生においても、受け持ち患者にケアを提供する際に、ケアの必要性や患者に合ったケア方法について多くの指導が必要であった。このことから、今後実践能力を高めるために既習の知識を有効に活用し、統合力が身につく教育方法も検討していく必要がある。さらに、今回の実習では、学生が受け持つ患者は、術前から術後の一連の過程を経験できる症例ばかりでなく、状況によっては術後の回復期から受け持つ場合があった。このことについては、島田は、学びを深化させるためにはカンファレンスで取り上げるテーマを厳選することで、手術侵襲による生体反応の基礎的知識が強化され、術後の患者のイメージを容易にし、術後看護の学習が深まり、知識が実践として使えるまでに発展する<sup>16)</sup>と述べている。すなわち、教員は学生の学びの状況を判断しながら適切な時期に必要なカンファレンステーマを意識的に取り上げるように助言する必要があると考える。

本研究の限界として、学びのレポートに記載された内容が、学生個々によりバラツキがあり、これらのレポートから学生の学びすべてを網羅できているとは言い難い。また、今回は、成人看護学実習Ⅱ（急性期）での学びを横断的に概観したが、学びがどのように変化したのかを縦断的に言及していくことや学生の実習前の準備性との関連を見ていくことで、今後の指導の方向性を見出せると考える。この点も今後の課題と考える。

## VI. 結語

成人看護学実習Ⅱ（急性期）での周手術期特有の学びは、【手術療法が患者・家族に及ぼす影響】【包括的なアセスメント】【周手術期の特徴を踏まえた援助】【退院に関する認識】で、臨床ならではの学びが得られていることが明らかになった。

この学びの要因として、受け持ち患者を通しての手術見学や受け持ち患者の選定を工夫したことが影響していると考えられる。また、多面的な情報収集は、学生と患者との信頼関係の構築によって獲得される能力の一つであると考えられ、学生と患者との関係

の構築が円滑に進むような指導も重要である。さらに、学生に知的好奇心や刺激を高めるような声掛け質問も学びを促進させるために必要である。

一方、看護実践についての学びの記述が少なかったことから、今後は、実践の学びを言語化する能力の育成と、学生の学びを深化させるために体験できなかった内容をカンファレンステーマで取り上げ、学生間で共有する機会を設ける工夫をすること、実習前に学内で実践できる知識の統合や発展につながる演習のあり方を検討する必要がある。

## 謝 辞

今回の研究にご協力いただきました本学科3年生の皆さんに深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 二十軒温美：看護学先行研究からみた臨地実習指導者の現状と課題，園田学園女子大学論文集，2017，51，53-60.
- 2) 文部科学省：看護学教育モデル・コア・カリキュラム，[mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2017/10/31/1217788\\_3.pdf](http://mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf)，(2018.1.8).
- 3) 野島敬祐，片山知美，藤原正恵：4年制大学の看護学実習を通して学生が得た学び（第1報）-1年次及び2年次の看護学実習における学び-，宝塚大学紀要，2014，28，151-160.
- 4) 上掲書2)
- 5) 中田智子，河相てる美：臨地実習指導者からみた手術室実習での学びと要望に関する調査 アンケートの調査分析より，共創福祉，2015，10，21-28.
- 6) 赤石三佐代，川久保和子，宮武陽子：成人看護学実習（急性期）における手術室実習での学生の学び，足利短期大学研究紀要，2009，29，23-27.
- 7) 長嶋祐子，中居由美子，風岡たま代他：成人看護学実習で最も学んだと認識している内容 急性期実習と慢性期実習の実習終了後レポート分析から，横浜創英短期紀要，2012，8，155-160.
- 8) 宮武陽子，川久保和子，毛塚早織：看護基礎教育カリキュラム改正前後の成人看護学実習（急性期）における学生の学びの比較，足利短期大学研究紀要，2012，32，105-111.
- 9) 工藤うみ，野戸結花，川崎くみ子他：成人看護学実習における周手術期看護の学び，弘前大学

大学院保健学研究科紀要, 2008, 7, 37-43.

- 10) 磯本暁子, 柘野浩子, 塩見和子他: 成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の  
実習開始前自己学習目標と学習内容の分析, 新  
見公立大学紀要, 2015, 36, 43-48.
- 11) 木村美津子, 中嶋真澄, 平井純子: 成人看護学  
実習における手術見学学生への学習内容提示に  
よる学習効果, 神奈川歯科大学短期大学紀要,  
2014, 1, 25-31.
- 12) 高比良祥子, 山田貴子, 吉田恵理子他: 看護学  
生が認知する術後観察場面での看護師の関り,  
長崎県立大学 看護栄養学部紀要, 2016, 15,  
1-9.
- 13) 上掲書 9).
- 14) 島田三鈴: 成人急性期看護実習におけるカンフ  
ァレンステーマ提示の有無による学びの検討,  
川崎医療福祉学会誌, 2007, 17, 97-105.
- 15) 同掲書.